

空



2011・2

**SORA** 35号

# 繭玉

柴田 佐知子

輪飾の楫飛ばす灘の風

一族を見上げてばかり春著の子

繭玉の触れたるのみに母揺らぐ

川波は白き布なり初芝居

安心の底に埋もれて寒鯉は

—「俳句」一月号より—

死ぬまでと誓ひて淡くなり霜夜

介護の手また洗ひをるクリスマス

厚着の子涙を横に拭ひけり

初がすみ父も柱も動かざる

はじめより歪みてゐたる鏡餅



おほかたは忘れし父に屠蘇をつぐ

土蜘蛛は討たれてばかり読始

海神に射初の音のとどきけり

破魔矢立て歩めば山河従ひぬ

はづみても土の色なり初雀

宝船脚衰へし父に敷く

手をひろげ見せ合つてゐる春著の子

はつきりと言へぬ子の手に独楽を置く

寒満月自決の刃先思ふべし

揚げられて花のごとしや鬼虎魚

寒鯉の池動かして現るる

湯槽まで手摺めぐらせ春を待つ

## 竜の玉

吉村 撰 護

## 小春日

苑 実 耶

亡き父と間違はれたる冬帽子

雪を被て神々遊ぶ山となる

木枯や焼牡蛎小屋の人だから

本読みて眠る習ひや北塞ぐ

着水の鴨つんのめる角力灘

冬ざれや移動は点滴ベッドごと

冬の草嚙んで老猫帰宅せり

看護師も患者も医師もマスクして

十代の賞金王や竜の玉

小春日や泣く子の背中とんとんとん

狼の声に鎮まる鐘の音

鮫鰯の口まで水を飲ませけり

岸壁の土曜朝市頬被

湯気の立つ厨に籠る大晦日

雪女人の心の諮られず

しあはせは必ず来ると初みくじ

菊くらべ

鳳

蛮

華

枯菊焚く

松

田

明

子

諄々と百舌鳥に諭され山下る

経蔵を閉ぢてたちまち虫の闇

さはやかや分水嶺の峠越え

案山子にも男と女生まれけり

小鳥来てしなる芒を秤とも

水音の近き野点や小鳥来る

西海に楳円と転ぶ冬落暉

青空を映してひとり蓮根掘る

菊くらべ鶴は自菊亀黄菊

泥の上に田舟二艘や蓮根掘

雪虫や校舎の北の土湿り

枯菊の炎に投ずるまでの色

林間にひと筋淡き落葉道

枯菊焚く煙を返す大廂

弓場にて的を繕ふ冬日向

大樟の根方に枯菊焚きし跡

去年今年 高倉恵美子

年迎ふ 安武晨子

養生の記録ばかりや古日記

引き算で生きてゆく気の年迎ふ

リハビリの杖を大事に去年今年

雪しまく地上に不意といふ油断

白菜を道行く人に持たせけり

忘れたきことなどあらず年忘れ

膝の水抜く針太し外は雪

短日の背負ひしままの心の荷

着膨れの友より噂広まれり

落葉踏みつつ存間を繰り返す

柿畑を荒した猪の肉貰ふ

大方は舟なき舟屋大根干す

濡れ縁に溶けてしまひし雪達磨

一寸の光陰唱へ寒念佛

大声で嚙下体操日脚伸ぶ

よき鬼のゐるやも知れぬ豆を撒く

去年今年 河 隅 惠 子

梅の花 小 林 朱 夏

先生の表札みえる冬桜

柚子湯出て妹柔らかくなりけり

数へ日の空をみてゐる鴉かな

短日のクレーン腕を伸ばしきる

違ふ事考へてゐる冬茜

白菜を割り玄海の風に干す

さながらに猫みてくれる去年今年

境内の砂利も湯気立つ玉せせり

あかがりを舐めれば硬しあまかりし

煮凝の危ふき揺れの納まりぬ

寒柝のすぐる眼鏡をはづす間に

雄鶏の短く鳴いて悴めり

数へ日の猫戻り来しといふ電話

寒月の神の域ゆく高さかな

加賀の人と隣る雪吊の花結

座布団の小さき茶店や梅の花

# 黄落

樋口みのぶ

# 一輪

矢野百合子

小春日や旅の半ばに足湯して

鴨啼くや浜に横たふ珪化木

紅うすく引く用のあり今日の月

遠き世の帆柱石に冬の潮

黄落や社に隣る焼餅屋

冬日美し平家亡びし潮には

恥ぢらへる母を見てゐる良夜かな

枯芝を引き寄せ眠る万骨塔

四股踏んで走り出したる冬帽子

火袋の中に一輪冬椿

まづ母の髪を切りたる年用意

しぐれ寺訪へば山鳩鳴きにけり

初春や緋をひるがへし巫女通る

猪は檻に全き魂抜かれ

膝つきてひざの形に春の土

鳥の餌に鳥がなりたるそぞろ寒



# 合掌

長

憲

一

萩の花こゑ朗々と緋の僧衣

廃線の一筋草の絮放つ

鉄塔に名月しばしとどまれり

堰越ゆるまでのさざ波秋深し

菊人形つくりて武者の影に入る

絢爛と阿蘇の暮れゆく芒かな

合掌のひとりに木曾の時雨かな

灰少し足して火鉢を定位置へ

# 空作品評

柴田佐知子

お年玉貰ふ時みな良い子かな 秋 千晴

注連飾をかけ床の間を飾り迎えるお正月のあの格別な雰囲気。ただお正月というだけでなんだか嬉しかった幼い頃を思い出す。お年玉を貰っているのは兄弟だろうか。親戚も集まっていて、いとこ達もいるかもしれない。どこか神妙にして見上げている子供たちが「みな良い子かな」という平易な言葉で鮮やかに詠みとられていることに驚く。普通の言葉で普通に表現して本質へとどいているのである。

俳句を始めてしばらくすると、俳句らしく作ろうと妙な格好をつけた言葉遣いをする人が多いように思う。「俳句らしく作る」から遠いところに俳句はあると思っただけだ。千晴さんの句は、妙なからいがなくいたって素直。優しい視線でとらえたものを真直ぐに詠んで爽やかだ。臨場感のある〈猪肉の分配に大加はりし 千晴〉もよい。

白鳥の羽根きしませて飛び立たり あさなが捷

〈白鳥といふ一巨花を水に置く 中村草田男〉と詠まれたように、大きな鳥である。純白の大きな翼をひろげて飛び立つときの迫力が「きしませて」によって伝わってくる。雀でも鳩でも、大小はあれ羽が擦れ合う音はあるのかもしれないが、「きしませて」の実感は大きな白鳥にふさわしい。

武士の出といふも足軽根深汁 大地 真理

「武士の出」という切り出しが中七で軽くないなされてしまい面白い。また軽妙な内容を受け止める座五の「根深汁」がいい。冬の代表的家庭料理のひとつ根深汁が、飄々とした味わいを醸している。

亡き父と間違はれたる冬帽子 吉村 摂護

若いときにはそれほど似ていないようであつても、年をとるほど親に似てくるようだ。顔に限らず姿や起居までも。冬の街角での景であろう。「冬帽子」がいい。

案山子にも男と女生まれけり 松田 明子

そう言われれば、案山子は纏うものによって男にも女にもなる。アダムとイブが神によって造りだされる天地創造の世界のごとき、「生まれけり」とのオーバーな表現が愉快だ。

### 養生の記録ばかりや古日記

高倉恵美子

体調を崩された一年だったと思われる。「古日記」という季語が見事に生かされた作品である。この句を読むと、忙しくて、或いは歳をとってどこへも行けないから句が出来ないなどというのは、言い訳に過ぎないことが分かる。新年は勝手にやっつけてくるし、暦も「新暦」へと変る。食卓には季節の食物が供されるであろう。暑さ・寒さ・日永など季語は身辺に溢れているのだ。恵美子さんの作句姿勢を見習いたい。

### 堰越ゆるまでのさざ波秋深し

長 憲一

堰を越えるときさざなみは消え、筋なす水になるのである。「までの」という措辞が的確である。堰によって表情を変える水に、深まる秋を見る鋭敏な感覚が素晴らしい。

綿虫の色に暮色のかかりけり 松田 明子  
綿虫のほどの愛なら持ち合はず 仲里 奈央  
綿虫や捕らへどころのなきをんな 山田 正子

綿虫はアリマキの一種で、漂う小さな綿屑のような姿には郷愁を誘われる。一句目、「暮色のかかりけり」に、冬の夕暮の静かさがひろがってくる。二句目、綿虫ほどの愛という喩えに惹かれる。かすかな心の揺れのような作品。三句目の正子さんの語り口も面白い。三人三様の綿虫である。

### 大陸の風も交はる玉せせり

亀井 紀子

「玉せせり」は正月三日に福岡市の筥崎宮で行われる神事で、締め込み一本の男達が靈玉を奪いあう。古来より大陸への門月であるこの地を踏まえたダイナミックな佳句。

次の二句の正確な描写もいい。

掃かれてはどんぐり嵌まる石畳 矢野百合子  
罨のがれ兎の足跡一直線 小林 朱夏

# 空集

## 柴田佐知子選

青空を割つて鬼門の冬もみぢ

綿虫の色に暮色のかかりけり

毒茸の申し分なき色かたち

猪鬣をかけて後を振り向かず

起ち上がる猪また倒る仕掛罨

したたかに猪のあばれし仕掛罨

折れし足肉を突き出る罨の猪

猪鬣の網ひとところ破れたる

どうにでもせよと倒れしままの猪

山寺の冷えにわが灯をひとつ足す

霜深し闕伽井に侍る桶ひとつ

一片も残さぬ覚悟銀杏散る

みほとけの千手多忙や年の暮

父祖よりの火鉢に皺の手をかざす

猫にもものいふて師走に遠くゐる

黒潮の入り込む湾や草の絮

粕屋 長 節子

行橋 安武晨子

福岡 吉村摂護

神渡し山の奥刃の仄ぬくし

お手玉の擦れ合ふ音や小六月

綿屑のやうな一片かへり花

大根を漬けて繻く源氏かな

藪となる庭に居着きし冬の鴝

山裾の暮らし単調菊枯るる

金色の毛の絡まりし鼯鼠

兄弟で三役つとめ宮相撲

手加減を言ひ含められ宮相撲

原生林くぐりて冬の阿蘇に入る

阿蘇谷の底に冬の灯ともりけり

熊本 松田明子